第四三三回　青葉会　令和四年五月二十六日（木）（吟行：井の頭公園　句会：武蔵野コミュニティセンター）

選　　者　川口孤舟

出席者　今井紀久男　柿崎忠彦　川口孤舟　久米五郎太　佐藤ただしげ　在間千恵
豊田ゆたか　西澤國護　長谷見敏　星田啓子　山田けい子

投句・選句　伊賀山そらお　後藤とみ子　小早健介　朱牟田恵洲　高橋康敏　土谷堂哉
中川雅夫　福島正明　古田昇　宮内規雄　山崎亜也　山内天牛　渡邊盛雄

選句のみ　重枝孝岳　庄司龍平　高橋清子（新人）　高橋敏郎　橋口隆　早川允章　山本三恵

《互選句》○は選者の特選　◎は孤舟選者の選

十点　白鷺の浅瀬に佇ちて塑像めく　孤舟（紀・千・恵・敏・ゆ・允・昇・啓・規・け）

八点　◎山際は未だ暮れやらず栗の花　康敏（紀・○孤・恵・清・允・○啓・び・三）
リモートや炭酸水の独り言　正明（紀・○忠・五・と・清・敏・啓・○亜）
ゴイサギの沈思黙考五月闇　啓子（紀・忠・五・健・堂・亜・天・盛）

七点　緑蔭や足の食みだすベビーカー　孤舟（紀・○と・○恵・○堂・正・昇・規）
葉桜やもうすぐ出来るさかあがり　とみ子（千・恵・清・敏・康・天・け）
母偲び妻の伽羅蕗灘二合　堂哉（紀・健・孝・○龍・清・昇・盛）
緑濃き庭の巣箱に卵三つ　ゆたか（紀・五・敏・隆・び・天・盛）
三井寺の鐘の音のせて青葉風　けい子（そ・紀・堂・ゆ・允・び・昇）

六点　◎羅や真砂女となれず句を作る　けい子（紀・孤・健・千・康・三）

五点　◎山法師そばにはな子の住し家　忠彦（紀・孤・五・正・け）
青葦に隠るる浮巣水澄める　五郎太（龍・ゆ・び・啓・○盛）
ピアノ掛け白きに替へて夏はじむ　とみ子（紀・龍・清・隆・啓）
青葉のオゾン肺いっぱいに退院す　恵洲（紀・と・康・○允・天）
関取に眼鏡の付き人風薫る　仝（紀・と・康・亜・三）
◎あめんぼの水輪重なる井の頭　啓子（紀・孤・た・堂・隆）

四点　葉桜や病と共に喜寿となり　忠彦（紀・五・た・孝）
◎落し文なきかと探す井の頭　五郎太（紀・孤・孝・亜）
猿山に玩具つるせる五月かな　仝（紀・健・恵・三）
◎広き海のいずこに御霊卯波立つ　健介（○そ・紀・孤・堂）
走り梅雨島影烟る瀬戸の島　ただしげ（紀・康・ゆ・び）
老鶯の鳴く音求めて林間に　ゆたか（そ・紀・國・び）
木漏れ日にひっそり寄り添う山つつじ　國護（そ・紀・た・孝）
短調の楽の音沁む夜百合香る　啓子（紀・敏・ゆ・正）

三点

自力では剥けぬ夏柑好物なり　忠彦　（紀・〇孝・天）
草笛を吹いて希望を膨らます　孤舟　（紀・允・〇正）
広重の絵のごと初夏の須磨の浦　健介　（そ・紀・昇）
目にするは緑のみなり井の頭　千恵　（紀・隆・盛）
◎めずらしや北の漁場に鰊群来（くき）　ただしげ　（紀・〇孤・〇健）
朝凪にキラキラ輝く瀬戸の海　仝　（紀・敏・國）
テーブルに文庫本伏せ新茶汲む　康敏　（紀・龍・規）
兄弟でピアノ連弾こどもの日　仝　（そ・堂・國）
青葉風朱塗りの社空に映え　ゆたか　（紀・千・規）
緑風を身体にまとい橋に立つ　仝　（紀・忠・け）
万緑やひとり老いたる朴大樹　びん　（紀・千・ゆ）
石山の遠見の猿や夏の雲　仝　（紀・忠・亜）
薄暑光昼の梟刮目す　仝　（〇紀・健・啓）
母の忌に勿忘草を供へけり　昇　（紀・忠・規）
クレマチス濃き紫に魅入られり　亜也　（紀・敏・隆）
犬同士挨拶させる夏の朝　仝　（紀・孝・龍）
五月来る誕生祝いは足まくら　天牛　（紀・龍・三）
◎万緑や池を見おろすレストラン　けい子　（紀・孤・康）
万葉の宴をしのぶ柿の葉ずし　盛雄　（紀・國・昇）
何かにと心の揺るる余花の雨　仝　（紀・千・啓）

二点

夏近しボート乗り場に人の列　そらお　（紀・隆）
◎楠公も平和祈念像も風薫る　紀久男　（孤・〇五）
右近らの「白波五人男」
活きのいい若手颯爽初夏芝居　仝　（と・正）
コロナ禍の棒線グラフ山滴る　孤舟　（紀・と）
軒下の零れさうなる燕の子　仝　（恵・允）
ふくろふと眼を合はせて茂み中　五郎太　（紀・敏）
緑陰に風の抜けゆく吟行かな　仝　（紀・た）
万緑や体育授業は御殿山　千恵　（紀・三）
空隠しそびえる樹々の青葉美し　仝　（紀・國）
読経せば若葉に憩う蝶小鳥　雅夫　（紀・敏）
梅雨晴間梢を通し光降る　仝　（紀・清）
バラの花育てる妻の愛こもる　國護　（紀・規）
甘過ぎぬマーマレードや夏来る　正明　（紀・天）
◎鉄道のジオラマ囲む子供の日　昇　（紀・孤）
髪分けて抜ける風あり五月晴れ　啓子　（紀・敏）
ひまわりの黄色平和の黄色かな　規雄　（紀・五）
万緑や老婆三人の高笑い　仝　（恵・亜）
野仏の美しき顔青葉闇　けい子　（紀・た）
えごの花すとんすとんと落ちる午後　亜也　（紀・け）

人呼べず間引く筍余りけり　亜也（紀・國）
静雄さん退院めでたし五月晴れ　天牛（紀・正）

一点

〆迫る麦酒おにぎりほうばりて　紀久男（た）
散髪しいざ吟行に初夏三鷹　仝（け）
輝くや新緑の風遊ぶ子等　忠彦（紀）
新緑に獣も麗し動物園　仝（紀）
池の面にあちこち輪描くあめんぼう　千恵（紀）
紫蘇香る諸手にはさみポンと打つ　仝（紀）
鳩（かいつぶり）素もぐり楽しむ初夏の池　ただしげ（千）
目にしみる青葉繁れる井の頭　仝（紀）
男の子一人四代続く端午かな　堂哉（紀）
石楠花は老いを賞ずるや歌いおり　雅夫（紀）
湖畔べり新緑写り波静か　國護（紀）
夏の隠沼浮き上がりこぬかいつぶり　びん（盛）
焼きそばを鴉が狙う夏木立　仝（紀）
葦の森分け出で子鴨漁覚ゆ　啓子（紀）
弁天の参道探し木下闇　亜也（紀）
苛立たし五十年見ゆ沖縄忌　盛雄（紀）

※　※　※　※　※　※

【句　評】

十点句　白鷺の浅瀬に佇ちて塑像めく　孤舟

恵洲さん・・・吟行の成果を採らせていただきます。吟行苦手の選者は吟行の難しさが分かりますので、敬意を籠めて

八点句　山際は未だ暮れやらず栗の花　康敏

孤舟さん・・・あの青臭い独特の強い匂いを遠くまで漂わせる栗の花が、夕日に白く輝き続け、日暮れはまだ先のようだ。

恵洲さん・・・まだ暮れ切らない遠い山際と独特の匂いを放つすぐ近くにある栗の花の取り合わせがいいですね。

啓子さん・・・こうした景を句に出来たらと思い乍らもう長い事になりました。動きのある措辞に地味な栗の花を合わせられ、山や森の生きものが一日の息を吐き、夜の帳が落ちようとしている時間が感じられるようです。

紀久男・・・・十年以前の吟行の折、万里子先生から栗の花の匂いについてご感想を述べられ、小生の同意を求められたこと、想い出しました。次点にいただきました。

リモートや炭酸水の独り言　正明

忠彦さん・・・洒落た句と思いました。

とみ子さん・・リモートにも お慣れになった様子。

啓子さん・・・コロナ禍で急速に進んだリモートでの業務。キーボードの音と、画面

を睨んでいるときにふと気づいたプチプチという炭酸の爆ぜる音。それを独り言と捉えた感性。内面を映すような感じすらするようで。

亜也さん・・・プツプツ、ブツブツ。斜に構えての切れ味。

ゴイサギの沈思黙考五月闇　　**啓子**

堂哉さん・・・散歩の時に良く見かけます。首も決して動かしません。たいがい一羽ですから、君の家族は？と声をかけたくなります。

亜也さん・・・沈思黙考が的確。

天牛さん・・・昔の人もこういう姿を沈思黙考と云ったのでしょう。

盛雄さん・・・中七の沈思黙考が良い。できればゴイサギは漢字の五位鷺で如何でしょうか。

七点句

緑蔭や足の食みだすベビーカー　　**孤舟**

とみ子さん・・涼しい風に寛ぐ赤ちゃんのぷっくりとした足が可愛い。

恵洲さん・・・ベビーカーの前の手すり？にかわいいあんよを乗せている赤ちゃんを時々見かけます。緑陰によく映えています。

堂哉さん・・・可愛い景色ですね！ママは何をしているのかな？恥ずかしながら、食みだすがこの字とはしりませんでした。

葉桜やもうすぐ出来るさかあがり　　**とみ子**

千恵さん・・・逆上がりは子供たちにとって皆より一つ抜け出すワンランク・アップの技のようです。皆これを目指して頑張る様子がいいですね。

恵洲さん・・・桜のころ入学して、葉桜の今、もう逆上がりが出来るようになったのかな？えらいなあ。・・（逆上がり出来ぬままにて卒業す　恵洲）

康敏さん・・・「葉桜や」で、花の頃から練習してきた小学校低学年の生徒が目に浮かびます。季語の使い方がお上手ですね。

天牛さん・・・いい季節です。もう一息頑張ってください。

母偲び妻の伽羅蕗灘二合　　**堂哉**

龍平さん・・・料理お上手な奥方+灘二合+幸せな人生を送られた母上。この組み合わせはこの世の至福の一つです。

盛雄さん・・奥様の手製のキャラブキで灘の銘酒を飲みながら母を偲ぶ。孝行息子？

緑濃き庭の巣箱に卵三つ　　**ゆたか**

隆さん・・・人の営みは一年中。比べて鳥の産卵は時期を選ぶ。卵三つ見つけた喜びが伝わる。「新緑や庭の巣箱に卵（らん）三つ」ではいかがでしょうか。

天牛さん・・・お楽しみがふえましたね。商社に勤めた人が今や鳥の卵をめでる心境にかられたのですね。

盛雄さん・・・愛鳥ファミリー、いいですな。

三井寺の鐘の音のせて青葉風　　**けい子**

堂哉さん・・・耳と肌に心地好い波が寄せて来ます

六点句

羅や真砂女となれず句を作る　　**けい子**

孤舟さん・・・〈羅や人かなします恋をして〉鈴木真砂女。真砂女を目指す俳人、頑張れ！

千恵さん・・・真砂女さんの生き方もなかなか激しかったようで・・・。恋の詩の

一つくらい詠んでみたいものです。まぁ、無理ですけど。
康敏さん・・・真砂女の「羅や人悲します恋をして」のオマージュですね。確かに人悲します恋などしないで、俳句をひねっていた方が無難です。

五点句

山法師そばにはな子の住し家　　忠彦
孤舟さん・・・象舎にはもうはな子は居ないが、山法師は今年も咲いている。
紀久男・・・・・万里子先生の愛したはな子象。空き家になって久しい。動物園の一番人気でしたから。後釜が待たれます。

青葦に隠るる浮巣水澄める　　五郎太
盛雄さん・・・今回の吟行の秀句。ベテランの作品と思います。
紀久男・・・・残念ながら、青葦、浮巣、水澄む　の季重なりです。

ピアノ掛け白きに替へて夏はじむ　　とみ子
龍平さん・・・・”ラフマニノフ　ピアノコンチェルトN02でも　弾くか？　白ドレスのマリリン・モンローが脇に座ってくれたあの暑い日を想い“　などと言い出す稀有のピアニストの句かな？~
隆さん・・・・「春過ぎて夏来たるらし白妙の衣…」もあるほど、白は夏の象徴。
啓子さん・・・静かな生活の中でも季節の移り変わりを敏感に愛おしく感じておられるのでしょう。

青葉のオゾン肺いっぱいに退院す　　恵洲
とみ子さん・・退院の晴れ晴れとしたお気持ちを、率直に詠まれています。
康敏さん・・・退院の喜びが弾けるようです。
允章さん・・・青葉の発する殺菌力のあるオゾンを胸いっぱいに吸って元気に退院する様が見える。
天牛さん・・・病院の空気は清潔ですが肺一杯吸おうと云う気にはならぬものです。肺一杯がいいですね。

関取に眼鏡の付き人風薫る　　恵洲
とみ子さん・・　微笑ましい一コマを上手く掬いとった句。
康敏さん・・・眼鏡の付き人はテレビでよく見かけます。「風薫る」ですから場所入の光景でしょう。浴衣に眼鏡の付き人で、正装の関取が颯爽と見えます。

あめんぼの水輪重なる井の頭　　啓子
孤舟さん・・・脚は長く水面をすいすいと滑走する水馬（あめんぼ）。水馬の進んだ幾筋の水輪が光り輝いている。
ただしげさん・・井の頭公園池の橋の上から見たあめんぼうの動きを上手く捉えていて面白い。
隆さん・・・・夏のたまりには、あめんぼをよく見つける。
「井の頭あめんぼ描く水面（みなも）の輪」でいかがでしょうか。

四点句

葉桜や病と共に喜寿となり　　忠彦
ただしげさん・・病と共生して喜寿を迎えたこと、おめでとう！
紀久男・・・・・馴染みの居酒屋で祝杯（会津の美酒）を挙げたいですね。

落し文なきかと探す井の頭　　五郎太

孤舟さん・・・ロマンあふれる季語を使って成功。見付けられたかな？

亜也さん・・・和菓子屋にはあるんですけどね…。

猿山に玩具つるせる五月かな　　五郎太

恵洲さん・・・吟行の成果と拝察。目の付け所が面白い。

広き海のいずこに御霊卯波立つ　　健介

孤舟さん・・・知床半島での海難事故。卯波の恐ろしさをKAZU1の運航者は知らなかったのか。

走り梅雨島影烟る瀬戸の島　　ただしげ

康敏さん・・・梅雨の前兆の走り梅雨、垂れ込める雨雲に島々は既に烟っている。

木漏れ日にひっそり寄り添う山つつじ　　國護

ただしげさん・・木立の間から日差しが漏れ、その中に山つつじが咲いている光景を「ひっそり寄り添う」と詠んでいるのが良い。

短調の楽の音沁む夜百合香る　　啓子

敏郎さん・・・夜香る百合の花、確かに短調の域かも。

三点句

自力では剥けぬ夏柑好物なり　　忠彦

孝岳さん・・・夏蜜柑を一つ、山頂で食べながら下界の川を眺めていた小学生の頃を思い出しました。山口の夏蜜柑は格別です。

天牛さん・・・だんだん指先の力がなくなってくると大好きな蜜柑の皮がむけなくなります。同感です。

草笛を吹いて希望を膨らます　　孤舟

正明さん・・・希望が薄れ行く近頃、現実はそれだけ暗いのです。「何とか希望を」の願いの感じがあります。

広重の絵のごと初夏の須磨の浦　　健介

昇さん・・・・大阪勤務時代、須磨の浦には息抜きによく行きました。古来、「源氏物語」や「笈の小文」の舞台としても名高く、今でも白砂青松の景勝地です。広重の絵とは言い得て妙。

目にするは緑のみなり井の頭　　千恵

隆さん・・・・散文的だが、井の頭公園の特色をよく捉えている。

「井の頭みやこの音をかき消す緑」ではいかがでしょうか。

盛雄さん・・・井の頭公園吟行の代表句です。

めずらしや北の漁場に鰊群来（くき）　　ただしげ

孤舟さん・・・かつては産卵のために北海道西海岸に大漁となって押し寄せた鰊。鰊御殿を生む盛況だった。近年は極めて不漁と聞いていたが・・・。

健介さん・・・「群来」なる言葉は初めて学びました。鰊が押し寄せるのも珍しいんでしょうね。

朝凪にキラキラ輝く瀬戸の海　　ただしげ

敏郎さん・・・まさにきらきら輝く瀬戸内が見えるようです。

兄弟でピアノ連弾こどもの日　　康敏

堂哉さん・・・あんなに仲良く連弾を楽しんでいたのに！音信不通になった気の毒な兄弟を思い出しました。

石山の遠見の猿や夏の雲　　**びん**

亜也さん・・・岩山なら中国辺りの雄大な景色になるところ。

薄暑光昼の梟刮目す　　**びん**

紀久男・・・・昼の梟は眼を閉じています。好物を貰ったんでしょうか、或いは何か興味を惹くいきものか果物？人間？知りたいですね。季語の斡旋も見事なベテランの小気味よい句です。

五月来る誕生祝いは足まくら　　**天牛**

龍平さん・・・嬉しいお祝いですね　多分お孫さんから?~

クレマチス濃き紫に魅入られり　　**亜也**

隆さん・・・・「クレマチス」は紫陽花と同じく、梅雨を彩る花。

「紫の濃きクレマチス梅雨空に」ではいかがでしょうか。

万緑や池を見おろすレストラン　　**けい子**

孤舟さん・・・吟行に疲れて、井の頭池を見下ろせる小高いレストランへランチに寄った。

康敏さん・・・井の頭の古城みたいなレストラン「芙蓉亭」を思い浮かべました。しかし、コロナ感染拡大で閉店して今はありません。その跡の紅茶店「ムレナスティー東京」からの眺めでしょうか。

二点句

夏近しボート乗り場に人の列　　**そらお**

隆さん・・・・井の頭公園のボートは大人の夏の楽しみでもある。「井の頭でのデートは別れる」というジンクスがあったと思う。乗りたい人の悪知恵か。

楠公も平和祈念像も風薫る　　**紀久男**

孤舟さん・・・長崎出身の北村西望が武蔵野市に転居、井の頭公園に自身のアトリエを建立。

五郎太さん・・皇居にも長崎にも、軍国の世も平和な時代も爽やかな薫風が吹く。吟行参加者の句は自句も含め、季重ねのものが多かった中で、歴史や世の中を大きくうたったこの句に感心しました。今回初めて行きましたが、井の頭動物園の奥には北村西望の数多くの彫刻を展示する彫刻館がありました。

右近らの「白波五人男」

活きのいい若手颯爽初夏芝居　　**紀久男**

とみ子さん・・若手の生き生きとした演技が清々しい。

コロナ禍の棒線グラフ山滴る　　**孤舟**

とみ子さん・・・理系の棒線グラフと季語の取り合わせが良いです。

軒下の零れさうなる燕の子　　**孤舟**

恵洲さん・・・燕の子が「零れそう」という見方が面白いです。

ふくろふと眼を合はせて茂み中　　**五郎太**

敏郎さん・・・ドキッとする奇異な体験談！

緑陰に風の抜けゆく吟行かな　　**五郎太**

ただしげさん・・天気が良く、新緑の木陰は気持ちがよく、楽しい吟行だった。

読経せば若葉に憩う蝶小鳥　　雅夫
敏郎さん・・・仏教の理想郷、浄土の世界‼
紀久男・・・・若葉と蝶小鳥で季重なりです。焦点を絞ったら如何でしょうか。

鉄道のジオラマ囲む子供の日　　昇
孤舟さん・・・大宮・鉄道博物館の広大なジオラマは大人にも一見の価値あり。

ひまわりの黄色平和の黄色かな　　規雄
五郎太さん・・・ウクライナ国旗の青と黄は、空と小麦、あるいは空とひまわりとか。１９７０年製作イタリア映画『ひまわり』が描いたウクライナはドイツ・イタリア軍とソ連軍の激しい戦場の跡、広いひまわり畑に慰霊碑が立っていた。あの頃のウクライナは社会主義建設の希望という存在だった。

万緑や老婆三人の高笑い　　規雄
恵洲さん・・・名高い草田男の「吾子の歯」と対照的な、多分歯の大分抜けた老婆と万緑が面白い。マクベスの三人の魔女を思わせて、不気味なところも。
亜也さん・・・水墨画の寒山拾得を思わせる味あり。
※紀久男・・・皆さまが選句される中で、西東三鬼に「万緑に三人の老婆笑へりき」があるので採るのを見合わせたとのご指摘を二、三頂いたので、類句と判断しました。

野仏の美しき顔青葉闇　　けい子
ただしげさん・・道端に建てられたお地蔵さまや道祖神、柔和なお顔で、青葉・若葉の季節で心もやすらぐ。

一点

〆迫る麦酒おにぎりほうばりて　　紀久男
紀久男・・・・井の頭吟行で昨年見つけたベトナムフレンチレストランに行ったところ、予約でいっぱい。しかもその前にあるそば屋は休み。已む無く國護さんとコンビニお握りを購入。歩き疲れてすぐ句の席へ。余裕なく、その場で作句するなどして最低の出来でした。

鳰（かいつぶり）素もぐり楽しむ初夏の池　　ただしげ
千恵さん・・・まだ子供のかいつぶりがあちこちで餌を取るため水中に潜る仕草がとてもかわいらしかった。その情景をうまく表現されてると思います。
紀久男・・・・残念ながら、鳰、初夏　の季重なりです。

夏の隠沼浮き上がりこぬかいつぶり　　びん
盛雄さん・・・小魚が捕食出来ない時は潜水が長くなる。まさに水中に消えたごとし。
※紀久男・・・・残念ながら、夏、かいつぶり　の季重なりです。

§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§

次回青葉会予定

令和四年六月二十三日（木）　会場：竹橋毎日新聞社ビル　赤坂飯店竹橋店
時間：十二時～十五時

◇参加者は当季雑詠５句。投句は２句まで。投句締切：六月二十一日（火）中。
参加のご意向はお早めにお願い致します（赤坂飯店に人数を伝える要あり）。ご参加のご意向、投句は今井宛FAXか郵送、或いは星田メール（keiko-reve@c07.itscom.net）までお願

い致します。因みに昨今の郵便は三日かかります（土日の配達はないのでご注意を！）

■ ■ ■ ■ ■

青葉会報

一、　五月晴れの井の頭公園吟行。同地初めてのびんさんら9名が吉祥寺駅の公園口に10時半集合し出発。名古屋のけい子さん、孤舟選者は遅れて合流。掻い堀で外来魚減り葦や姫蒲が茂り小魚が殖え鳰（かいつぶり）が繁殖。この日は鳰の仔の水中に潜って捕食する仕草可愛く一番人気でした。一方季語の分類で云えば、鳰は冬、鳰（にお）の浮巣は夏、鳰の仔は軽鴨（カル）の仔に準じて夏として許されると思いますが如何でしょうか。

坂を上って有料の動物園に入り個別行動。コロナ禍の故か遠足の小学生は少なく、一般客も少な目でした。山雀、四十雀、目白などの夏の小鳥舎が空っぽなのに驚きました。

句会は13時半～16時30分、会場手配をしてくださった亜也さん始め12名出席。星田さんの「真澄」（諏訪）、千恵さんの「蓬莱」（飛騨）、忠彦さんの会津の酒、小生の「浪江の酒」（Land Mark）（福島原発の米を山形は長井の酒造〈龍平さんの高校同期が蔵元〉が醸造、復興の目玉商品）、國護さんの缶ビール、ただしげさんの「さぬき揚げ」、けい子さんの人形焼き（サザエさん）等を飲み食いしながら、五郎太さんの的確な進行で、ご覧の通り、孤舟さん、康敏さん、正明さん、啓子さんが好成績でした。

種々話題は、恵洲さんの手術成功、龍平さんのご次男らの酒造りが地元加西市から表彰されたこと等々。句会終了後帰り道途中の焼き鳥いせやに行ってみたのですが大人数の為入れず二人のみ。

また今回から、先ずはと選句のみにて参加下さった新人高橋清子さんが初参加されました。清子さんは昭和43年入社、びんさんが産業電子輸出課長として海外から赴任されたときの部下と伺っております。そのうちに句会にご参加いただくことを期待しております。

二、　**関係者近詠**

国境を越ゆれば難民春の雪　眞希子
芽吹く地へ空へ何故爆弾ぞ　〃
教会の墓地へ分骨スイートピー　〃
たんぽぽや始末も上手に年金者　〃
いきのをの三羽の棹や鳥帰る　弘子
ちよちよと呼ぶ声母ある雀の子　〃
草の色石の色して蛙出づ　〃
船波のまにまに揺るる春の鴨　〃
球根の据わり良き瓶ヒヤシンス　〃

春の宵門灯ひとりで灯るころ　陽亮
春の夜一人居なればザッピング　〃
青き踏む一歩一歩を心して　〃
主夫五年鰆を捌くことなども　〃
生き過ぎを自嘲（わろ）うて目刺焦がしけり　〃
吉右衛門の至芸を偲ぶ
冴返る流人俊寛惻々と　紀久男
盛綱陣屋
梅匂ふ芸に深みの菊之助　〃
團十郎命日
生真面目な團十郎偲び豆を撒く　〃

――――――「森の座」六月号（横澤放川選）

いつしかに似たもの夫婦古茶新茶　盛雄
病抜け日々好日や風薫る　〃
子らと酌む米寿の祝ひ豆の飯　〃

風薫る背筋と歩数伸びにけり　健介
昭和の日耐へ難きを耐へよくぞ来し　〃
妻の手の向日葵の種をとる小鳥　紀久男

万緑や吾子のジーパン穴広し　盛雄
村は市に細る田道や昭和の日　仝

竹林の日の射すあたり熊谷草　允章
金蘭のおちょぼ口ほど開きけり　仝
大輪の芍薬伏しぬ雨の中　仝

三、　孤舟選者近詠

竹針でかけしレコード昭和の日
右書きの老舗の屋号武者人形
天に星地に絢爛の花吹雪

新茶未だ宇治静岡の知人病む　紀久男
掛川の新茶振舞ふ大広間　仝
（掛川城）

――――――「きさらぎ句会」五月

かはせみの小頸傾げて視る水面
笹粽旧りし長子の柱疵

四、「青葉会合同句集」　創刊号（青葉会50回記念・平成二年11月発行）より創立発起人お二人（絹漱先生と黒川章彦さん）の作品より川合絹漱先生の句をご紹介します。

新婚の鍵差す白き扉（と）青葉風
火の上に秋刀魚の銀が崩（い）え落ちる
大寒や動かぬ雲のいつか厚し
一波ごと海は自浄や浜たんぽぽ
泣きながら登校の童女梅雨の道
磔が遺す血は黒秋の蟻
盲ひしが西日見上げて雨戸閉す
宙の蜘蛛小腋ばさみに露を抱く
盲導犬の歩度は自若や街師走
音たてぬ無数の蹶起薔薇蕾

風鈴の競ひ音やがて共鳴へ
果つるべき翳りも湛へ柿熟るる
祖父と女孫の枯野の餉にて薄日照る
蜆蝶の一花への愛永きかな
梅雨鴉羽が重しと屋根に歩す
身展べむと小さき怯れや嫩葉どち
カーブに皺む連結幌や旅五月
菊畑を掘る猫の肘女性めく
水牛の濡れつやの背に冬鴉
川と道は添ふがよろこび彼岸花

令和四年六月八日　紀久男　記